

4 授業づくりの流れとポイント



児童生徒が「わかった!」「できた!」を実感するための授業づくりは、どこから始めればよいのでしょうか? ここでは、後述の指導案(36 ページ～43 ページ参照)を例に、どんなことに留意すればよいのか、指導案作成の手順に沿って確認していきます。

それぞれの段階でやるべきことを○で、ポイントを⇒で、留意点を※で示します。

0 授業づくり前の確認

○教育委員会に届け出ている教育課程の編成と、それに対応する学習指導要領の各教科等の目標と内容をおさえておきましょう。

～児童生徒の実態を把握する～

○児童生徒の実態把握では、生活年齢や障がいの状態、言語・コミュニケーションなどから児童生徒の実態を把握して、学級の全体像を確認しましょう。

⇒個別の教育支援計画、個別の指導計画、日常の様子などを参考にします。

○計画したい単元に関する実態を把握し、「前時までの子どもの実態」を確認しておきましょう。

⇒日常の様子や関連する各教科等の授業の様子などを参考にします。

⇒単元に焦点化した実態把握によって、身につけさせたい資質・能力が明確になります。

把握内容例：国語科「書くこと」(小学校 知的障がい特別支援学級)

「てがみを かいて しらせよう ～相手に思いが伝わる文章を書こう～」

本時例学級での教育課程の位置づけ

特別の教育課程編成(知的障がいのある児童に対する教育を行う特別支援学校の各教科)
前時までの児童の実態(全般的な児童の実態)

- ・本学級は、1年生、3年生、4年生、5年生、6年生の児童5名が在籍している。実態差が大きく、学校教育法施行令第22条の3に該当する障がいの状態である児童もいる。
- ・「書くこと」の学習については、それぞれの実態に応じて日々取り組んでいる。翌日の時間割を視写することが全員の日課になっている。高学年の児童は、毎日の振り返りを日記に2・3文～長文で書いている。
- ・ひらがなやカタカナ、漢字の学習で、文字を書くことが難しい児童は、点結びや迷路などの学習を行うなど、実態に応じて書字の学習を行っている。
- ・絵日記や作文、観察カード、想像文などで経験したことや考えたことを書く学習も行っている。書くことへの抵抗感や苦手意識の強い児童は少ない。

～年間指導計画を確認する～

○計画する単元と他教科等の指導内容や行事との関連性を確認し、本単元のねらいや、他の単元とのつながりを確認します。これを踏まえて、「単元設定の理由」、「年間指導計画における位置づけ」を考えましょう。

⇒設定理由が明確になり、学びをつないで、学びの文脈をつくり出すことができます。

※届け出ている教育課程の編成に基づいた学習指導要領（小学校または特別支援学校小学部学習指導要領、中学校または特別支援学校中学部学習指導要領）に示されている各教科等の内容が、年間指導計画に位置づけられている必要があります。

例：単元設定の理由（→「4 単元と指導の構想」に記入）

- ・本校で最も大きな行事の1つである「歌のつどい」には、家族や地域の多くの方々が集まる。児童は「歌のつどい」に向け日々練習を重ね、友だちと協力して音楽をつくりあげていく過程を楽しんでいる。そこで、「歌のつどい」についての手紙を題材にすることで自分の思いや気持ちを言語化・文章化し、意欲的に書く活動に取り組めるようにしたいと考え、本単元を設定した。

例：年間指導計画における位置づけ

- ・「書くこと」については、年間指導計画に、相手の立場を意識して運動会の招待状を書く、遠足や宿泊学習のあとに楽しかった出来事を作文に書く、1年間のまとめとして思い出に残ったことを作文に書くなどの学習を位置づけている。その1つとして、本単元を設定した。

1 単元名

～単元名を考える～

○学習内容や学習活動がイメージしやすく、わかりやすいものにしましょう。

○その単元に対して児童が興味や関心をもてる単元名をつけましょう。

⇒ワクワク感があることは、児童生徒の学習意欲が高まることにつながります。

※ティーム・ティーチングで指導するときは授業者間で、単元の目標や内容、活動を共有する必要があります。児童生徒にも教師にもわかりやすく端的に表現しましょう。

※「5 単元の指導計画」までを先に考えてから後で単元名をつけた方がよいでしょう。

2 単元（題材）の目標

～学習指導要領における目標を確認する～

○本単元と対応する学習指導要領の各教科等に示されている目標・内容（学習指導要領との対応）を、確認します。

⇒各単元の目標は、育成を目指す資質・能力の3つの柱（知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等）に基づき設定されます。

※知的障がい特別支援学校小学部、知的障がい特別支援学校中学部の各教科等の目標および内容に替えた教育課程を編成している場合、「各教科等を合わせた指導」で単元計画を立てるときは、取り扱われる各教科等の目標の系統性や内容の関連性を明確にする必要があります。



※編成している教育課程による相違点

編成している教育課程により、以下のような相違点があります。

特別支援学校の教育課程を採用している場合

「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」に基づき、必要に応じて「小学校学習指導要領」「中学校学習指導要領」も参照します。

下学年適用の場合

「小学校学習指導要領」「中学校学習指導要領」を参照します。この場合、目標の到達度は小学校学習指導要領・中学校学習指導要領に示されたレベルとなり、目標の到達度を個に合わせて調整することはできません。

例：本指導案でねらう目標と内容（「特別支援学校小学部学習指導要領」より）

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
目標	【２段階】 ア 日常生活に必要な身近な言葉を身に付けるとともに、いろいろな言葉や我が国の言語文化に触れることができるようにする。 【３段階】 ア 日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に触れ、親しむことができるようにする。	【２段階】 イ 言葉が表す事柄を想起したり受け止めたりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合い、自分の思いをもつことができるようにする。 【３段階】 イ 出来事の順序を思い出す力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思い付いたり考えたりすることができるようにする。	【２段階】 ウ 言葉がもつよさを感じるとともに、読み聞かせに親しみ、言葉でのやり取りを聞いたり伝えたりしようとする態度を養う。 【３段階】 ウ 言葉がもつよさを感じるとともに、図書に親しみ、思いや考えを伝えたり受け止めたりしようとする態度を養う。
内容	○３段階 ウ（イ） 出来事や経験したことを伝え合う体験を通して、いろいろな語句や文の表現に触れること。	○２段階 B 書くこと ア 経験したことのうち身近なことについて、写真などを手掛かりにして、伝えたいことを思い浮かべたり、選んだりすること。 ○３段階 B 書くこと ア 身近で見聞きしたり、経験したりしたことについて書きたいことを見付け、その題材に必要な事柄を集めること。 ○３段階 B 書くこと ウ 見聞きしたり、経験したりしたことについて、簡単な語句や短い文を書くこと。 ○３段階 B 書くこと エ 書いた語句や文を読み、間違いを正すこと。	

～児童生徒の実態を踏まえた上で、集団全体の単元の目標を具体化する～

※新潟市の特別支援教育における指導案では、「単元の目標」を「集団全体の単元の評価規準」としています。ただし、単元全体をとおして身につけさせたい育成を目指す資質・能力を明確にするためにも、授業を構想する上で「集団全体の単元の評価規準」をしっかりと設定するとよいでしょう。

- 「2 単元（題材）の目標」で整理した内容を参考に、児童生徒の実態、活動の特徴、使用する教材、獲得させたい行動やスキルなどを加味して、集団全体を対象とした評価規準を設定します。単元の目標を具体的にし、単元全体の評価規準を3観点ごとに設定します（下記例参照）。

新潟市立〇〇〇学校
加齢障がい特別支援学級 〇〇学級 国語科指導案
令和〇年〇月〇日（場）第〇校時
（〇〇：〇〇～〇〇：〇〇）
指導者 教諭 〇〇 〇〇
支援員 〇〇 〇〇

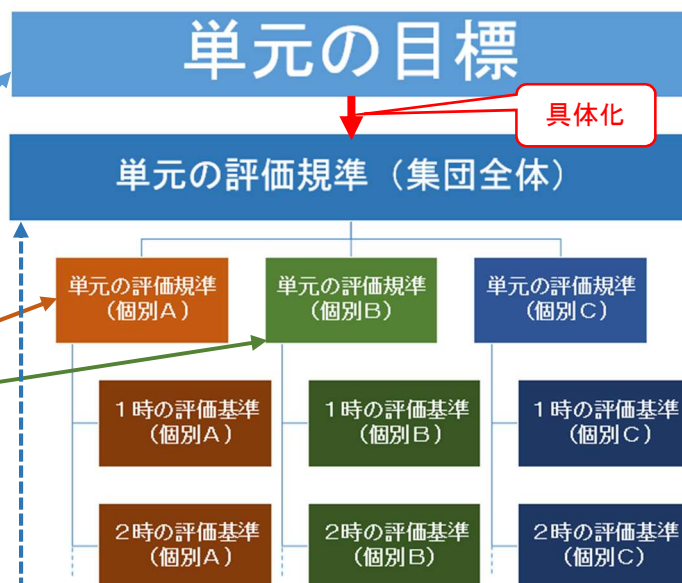
1 単元名
「てがみを みて して しよう ～相手に思いが伝わる文章を書こう～」

2 単元の目標
○歌のつどいに向けて自分が活動してきたことを伝え合い、いろいろな語句や文で表現する。【知識及び技能】
○歌のつどいに向けて活動の中から相手に伝えたいことを明確にし、必要な事柄を集めて手紙を書く。【思考力、判断力、表現力等】
○手紙をもらったり返事を書いたりする楽しさを感じながら、思いを伝えようとする。【学びに向かう力、人間性等】

3 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A 〇年	自分のしてきたことを単語で伝える。	教師の手本を見ながら、文章を模写する。	教師と歌のつどいについて話しながら、質問に答えたり、自分の言いたいことを伝える。
B 〇年	教師の模範を見ながら、丁寧な言葉で文章を書く。	教師の話を聞いて間違えに気づき、自分で適切な表現に直す。	必要に応じて、もらった手紙を読み返しながら、その返事を考える。

4 単元と指導の構想
(1) 単元（題材）と児童（生徒）
○本校で最も大きな行事の一つである「歌のつどい」には、家族や地域の多くの方々が集まる。児童は「歌のつどい」に向けて日々練習を重ね、友だちと協力して音楽をつくりあげていく過程を楽しんでいる。そこで、「歌のつどい」についての手紙を題材にすることで自分の思いや気持ちを言語化・文章化し、意欲的に書く活動に取り組めるようにしたいと考え、本題材を設定した。
○中高学年の児童が、すでに学んだことをもとに、単元の活動をリードできる場面をつくることを考慮する。
○児童の実態差が大きいので、単元目標は2つ以上設定することも考慮する。



例：集団全体の単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○自分の経験したことを伝え合い、いろいろな語句や文で表現している。（知識及び技能3段階 ウ（イ）） ○丁寧な言葉と話し言葉との違いに気をつけて、丁寧な言葉で文章を書いている。（知識及び技能3段階 ウ（イ））	○「歌のつどい」を知らせる手紙について、書く相手や書く事柄を決めている。 ○書いた文を読み返して間違いを正したり、必要な情報が書かれているかなどを確認したりしている。 ○宛名の書き方がわかり、正しく書いて手紙を完成させている。	○「歌のつどい」を見に来てほしいという思いをもって、手紙を書こうとしている。



⇒ここでは、評価規準を集団全体の目標として設定します。

⇒児童生徒を主語にして記述し、語尾は「～する」「～している」などの表現にします。

⇒学習評価の観点も踏まえて、育成を目指す資質・能力の3つの柱で設定します。

⇒学習指導要領に示された各教科等の目標と見方・考え方の関連を確認します。

○単元全体で身につけさせたい力や、単元終了時に望む姿などを設定しましょう。

○前単元や今後の単元、ほかの各教科等との関連、指導内容の段階的な系統性などを設定しましょう。

～集団全体の単元の評価規準を基に、個別の評価規準を設定する～

※評価規準と評価基準とは

評価規準	単元で育成を目指す資質・能力に対する達成度を具体的に表したものの。
評価基準	評価規準に対してどのくらい達成できたかを判断するために、いくつかの段階でさらに具体的な行動で表現したもの。児童の実態に即した評価につながります。児童生徒自身が自己評価（振り返り）をできるように児童がわかる言葉で表しておくといでしょう。

○各観点の評価規準の数は、1、2つ程度に精選しましょう。

⇒児童生徒を主語にして記述し、語尾は「～する」「～している」などの表現にします。

⇒単元全体の目標に対して、3観点ごとに、個別にそれぞれ立てます。児童生徒一人一人に身に付けさせたい資質・能力が明確になります。

※「0 授業づくり前に確認する」で確認した児童生徒の実態に応じて、一人一人の評価規準を設定しましょう。

※単元全体を見通して、個人目標を設定しましょう。

※児童生徒の実態は、「6 本時計画 (3)本時の目標と手立てに記入」します。

○3観点の内容が単元全体では網羅されるようにします。

○評価基準も評価規準と同様に、観察可能で、測定可能な記述（例えば数値化）にすることが重要です。

※評価基準は、児童生徒の達成や理解がどの程度であるかを計る目盛りの役割をします。児童生徒の実態に応じて、その目盛りの間隔は大きくなったり、小さくなったりします。

4

単元と
指導の
構想

～単元目標に向かってどのように主体的・対話的で深い学びの実現に迫るか考える～

○授業者がどのような意図をもって授業を構成したか、選定した目標に向かい、どのような手立てや工夫を講じて学習を進めていくかについて記述します。



～単元目標を踏まえた単元計画を立てる～

○「育成を目指す資質・能力」と「主体的・対話的で深い学び」を意識して組み立てましょう。

⇒主体的・対話的で深い学びは、新学習指導要領に示されたもので、児童生徒に育成を目指す資質・能力が育まれるための、授業改善を活性化していくための視点です。この視点に沿って単元の計画や改善をすることで、資質・能力を育むことを目標とした授業になります。

⇒単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、習得・活用・探究という学びの過程を意識した構成を考えることにつながります。

○主体的に学習に取り組めるように、学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面を設定しましょう。

○対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面を設定しましょう。

○学びの深まりをつくり出すために、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか、考えましょう。

○主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえて、以下の①～③留意点について検討し、単元計画を立てましょう。

① 時数・展開を考えるうえでの留意点

- ・児童生徒の興味・関心や考え、思いを取り入れていくことを大切にしましょう。
- ・なんのためにこの単元を学習するのかという目的を伝え、学習への意欲を高めていくとともに、学んだことを活用する場面などへの見通しをもたせましょう。
- ・単元内容で重要な点については、時間数を十分にとり、進行状況によって柔軟に変更できるようにしましょう。
- ・単元のまとめや振り返りのポイントを確認しておきましょう。
- ・「本単元と他教科等との関連」について検討します。

⇒単元の学習が、どんな場面につながっていくか、他教科等の学びとどのようにつながっているかなど、学びを発揮する場面を明確にしていくことで、学びの文脈をつくり出すことができます。

例：本単元と他教科等との関連

- ・本単元で書いた手紙は、実際に郵便局に行き、切手を買ってポストに投函する。国語科の学習から生活科の学習へ関連づけ、郵便のしくみについて、体験をととして学ぶ機会とする。



- ・ほかの各教科等や学校行事などとの関連を意識できるようにしましょう。
⇒各教科等との関連づけは、単元の学習以外の場面を活用することにつながります。

② 学習形態を考えるうえでの留意点

- ・個別で取り組む時間、ペアで考える時間、グループで話し合う時間などを、目標や指導内容、児童一人一人の実態に応じて組み合わせましょう。
- ・効果的に学習を進めていくために、机の配置や特別教室の活用など、環境を整備しましょう。

③ 教材・教具を考えるうえでの留意点

- ・児童生徒の興味・関心を引き出したり、「わかった!」「できた!」と実感したりできるように、ICT機器やホワイトボードなどの活用を検討しましょう。
- ・単元の内容や目標によって、小学校の各教科等の教科書から適切な題材を教材として活用することも検討しましょう。
- ・教科書を教材として活用するときには、児童生徒の実態や学年に応じて選定し、単元目標を達成するためのツールとして意識することが必要です。

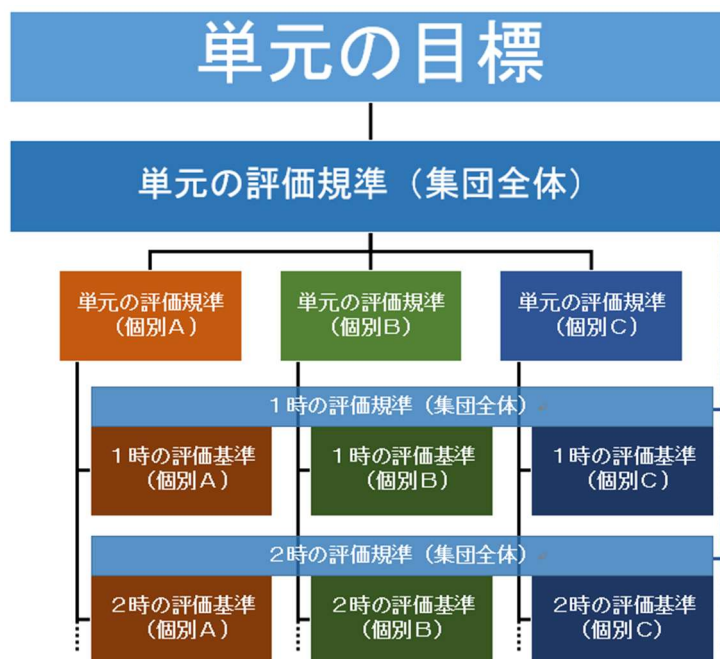
例：教材についてのメモ

- ・てがみで しらせよう（光村図書出版 小学校国語 1 年下）＜共通教材＞
- ・手紙の書き方（郵便局）＜共通教材＞
- ・「ありがとう」をつたえよう（光村図書出版 小学校国語 3 年下）
- ・手紙で伝えよう（光村図書出版 小学校国語 4 年上）
- ・前担任からの手紙
- ・個別のワークシート（オリジナルで作成したもの）



～本時のねらい（本時の評価規準）を考える～

- 「3 単元の評価規準」（集団全体）を踏まえて、本時における授業の内容や指導目標＝集団全体を対象とした本時のねらい（本時の評価規準）を設定します。学習状況を分析的に捉える観点別学習状況の評価の3観点が、単元全体で網羅できるように設定しましょう。
- ⇒ここで取り上げた第2時では、「思考・判断・表現」に絞って目標と評価基準が立てられています。



※観点別学習状況の評価

は、毎回の授業ですべての観点の評価するのではなく、単元や題材などのまとまりの中で、指導内容に照らして評価の場面を適切に位置づけるとされているためです。

(2) ～本時の構想を考える～

- 本時の構想は以下の点に留意して記述する。

- ・ねらいの達成に向けて、本時における具体的な手立てや指導の留意事項を記述しましょう。
- ・児童生徒の主体的な学習活動が促されるように本時において工夫する点を記述しましょう。

(3) ～本時の目標（個別の評価基準）と手立てを設定する～

- 本時の目標にかかわる、前時までの実態や達成状況を記述しましょう。

- 次に、個別の本時の目標（個別の評価基準）を設定します。これは学習評価のための評価基準にもなります。

⇒「3 単元の評価規準」と照らし合わせて、児童生徒の本時で目指す姿を具体的に記述します。

⇒具体的に表現することで、目標達成に向けた手立てが明確になります。

- 設定した本時の目標を達成するための手立てを記述します。

(4) ～抽出児童生徒について考える～

○その児童生徒を抽出した理由を具体的に記述します。

⇒抽出した児童生徒における、児童生徒の本単元の学習における実態ならびに情意面について、抽出した理由を記述しましょう。

(5) ～本時の展開を考える～

○本時の目標達成に向けて、授業の展開をイメージし、指導略案を作成しましょう。

⇒授業の展開を考えていくときには、児童生徒一人一人の発達段階や認知の特徴、思考のスタイルなどを把握し、体験的な活動や具体的な操作活動などを取り入れることが必要です。



※毎回の授業における「導入→展開→まとめ・振り返り」について、各教科等に共通する「授業の型」をつくることによって、児童生徒が学習活動に見通しをもち、主体的に学びに向かうことができます。

※授業の流れを考えるポイント

導入	・ 前時の復習から本時につなげる。 ・ 本時の課題と見通しから意欲につなげる。
展開	・ 基礎基本を身につける時間、発問について考える時間、友だちと意見交換する時間、まとめる時間、発表する時間などの学習活動を工夫する。 ・ 目標達成に向けて適切な学習形態（個別・ペア・グループ）を工夫する。 ・ I C T機器やホワイトボード、プリントなど、個々の実態に応じた教材教具を工夫する。
まとめ・振り返り	・ 「何を学んだか」「どんな気づきがあったか」「どう考えたか」などについて振り返り、言語化する。言語化の表現方法は、個々の実態に応じて工夫する。 ・ 児童生徒の自己評価も取り入れ、「わかった！」「できた！」ことを引き出す。

※例示の展開は、以下の3つのポイントを踏まえて作成されています。

- ① 【導入】では、前時を振り返ることで、本時の展開につなげます。また、めあてを発表する前に、発問から今日のめあてにつなげます。既習事項の問い掛けへの反応から、学習の定着を見取ることができます。また、他者がわかるように伝えようと考えることにもつながります。めあてが児童にも理解しやすく表現され、本時で何を学習するのかが明確になっています。
- ② 【展開①】では、発問に対する児童の反応も予測し、児童の思いを大切にし、柔軟な対応を考えています。

具体的に発問することで、児童が何を答えればよいのかが明確に伝わります。

- ③ 【展開②】では、決める事柄について児童個々が考え、友だちや先生との対話や経験のある児童への発問などを取り入れて展開することで、児童の手紙を書きたいという意欲が高まっていきます。

手紙を書き始める前に、基本的な知識を確認しておきます。児童全員に分かりやすく説明するために、小学校1学年の国語教科書を活用するとともに、ワークシートも工夫しています。

また、本時の学びと次時がつながる活動を取り入れています。次時で予定している実際に手紙を書き始める活動を見据え、知的障がいの特性に配慮した上で、発言を視覚的に残すために板書計画を工夫しています。

- (6) ○本時の評価は、個別の評価基準に基づき、本時の目標を達成した姿を、「おおむね満足できる状況」について具体的な児童生徒の姿として記述します。
- (7) ○環境構成図は、個々の児童生徒の実態に配慮して、席を配置します。
※例示は一例で、席の配置は、教科や学習内容を踏まえて変更します。

※ 授業実施後

～授業を実施する～

○これまでに計画した授業づくりをもとに授業を実施しましょう。

⇒一人一人の実態に応じて、分かりやすい言葉掛けをしましょう。

⇒計画通りに進めるのが難しい場合には、その場で実施内容を変更してみましょう。

⇒児童生徒が学んでいるか、しっかり観察しましょう。



～授業の評価をする～

○「6 本時の計画」で考えた本時の評価基準と、児童生徒の振り返りを参考にしながら、学習に対する到達度や学習活動の態度などを記録しましょう。

○単元のまとまりで、児童生徒一人一人の学習評価と教師の授業評価をしましょう。

⇒児童生徒の様子を記録しておくことで、授業者は児童生徒の学びを蓄積できます。

⇒授業記録は、児童生徒の変容を見取るうえで大きな役割を果たします。

⇒単元目標の達成に向けて、次の授業における指導の工夫に生かすことができます。

○授業者の授業評価として、児童生徒の学習状況などから、次時へどのように展開していくか、本時の流れや指導形態、目標設定、教材・教具の工夫などについて、変更するかを検討しましょう。

⇒よりよい学びのために軌道修正できること、工夫できることを考えることができます。

○単元終了時には、児童生徒一人一人の目標に基づいた「学習状況の評価」から、児童生徒個々の総括的な評価をしましょう。さらに、授業者として、児童生徒個々の総括的な評価と授業構成、支援の工夫、授業目標の妥当性などから「授業の評価」をし、「授業の評価」から単元計画や年間指導計画、個別の指導計画、教育課程の評価につながる「指導の評価」をしていきましょう。

～改善を積み重ねる～

○単元のまとめの評価をもとに、次年度の年間指導計画に変更すべき点がないかどうかを記録し、次年度の計画立案の参考としましょう。こうして学習評価をもとに指導の改善を行っていくことが、カリキュラム・マネジメントにつながっています。

※出典：「知的障害特別支援学級担任のための授業づくりサポートキット すけっと (Sukett)」(独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 知的障害教育研究班)

https://www.nise.go.jp/nc/study/others/disability_list/intellectual/sk-basket



コラム

単元または本時における、評価規準と評価基準について

本サポートブックでは、評価規準と評価基準の設定の手順として、以下のように解説をしています。

- ①単元の目標の設定（→②単元の評価規準（集団全体）の設定）
→③単元の評価規準（個別）の設定 →④本時の評価基準（個別）

この手順は、新潟市の特別支援教育における指導案の形式を基として、授業づくりの流れとポイントを解説したため、手順においてはこの限りではありません。前述の独立行政法人国立特別支援教育総合研究所による「すけっと（Sukett）」では、下記の例のように、③で単元の評価規準（個別）を設定した後、単元の評価基準（個別）を作成しています。

例：「0 授業づくり前に確認する」で確認した児童生徒の実態に応じて、一人一人の単元の評価基準を設定した例

児童	個別の指導計画		本単元の評価基準		
	長期目標	短期目標	知識・理解	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	周りの人の行動を見て、自分で何をするかを考え、自信をもって動けるようにする。	拗音・促音などを含めたひらがなを正しく読み、文字ブロックを使って3音程度の言葉を構成するとともに、音を聞いて文字に表す。	①自分のしてきたことを文章で伝える。 ②自分のしてきたことを単語で伝える。 ③自分のしてきたことを提示された選択肢の中から選ぶ。	①自分のしてきたことを自分で文章に書く。 ②教師の手本を見ながら、文章を視写する。 ③教師と一緒に確かめながら文章を書く。	教師と歌のつどいについて話しながら、質問に答えたり、自分の言いたいことを言ったりする。
	児童の実態				
	書けるひらがなは増えたが、50音の読み書きは完全には習得できていない。書くことは好きで、迷路や点結びが的確にできるようになった。友だちと同じことをやりたいという気持ちが強い。				
	児童の実態				
	気持ちを表現することが苦手で、会話で言葉に詰まることが多い。毎日振り返りを書くことで、出来事や気持ちを文章に表すことができるようになってきた。				

上記の例では、「知識・理解」「思考・判断・表現」において、3つのレベルの評価基準を設定しています。この場合、評価基準は評価規準よりも高いレベルの到達度、それよりも低いレベルの到達度を児童生徒の実態から予想し、設定します。このように、予想される児童の到達の姿として、3つのレベルを想定しておく、何らかの要因によって児童がうまく課題達成できなかったとき、あるいは予想以上の課題達成を見せたときに、児童の行動やつぶやき、表情を、教師は、より敏感に読み取ることができるようにするとされています。

ぜひ、出典のホームページをご覧ください。

評価規準

評価基準①：評価規準より高いレベルの到達度

評価基準②：評価規準同等の到達度

評価基準③：評価規準より低いレベルの到達度